

西川
岡藤
大嶋
矢野

扉

客入れ

舞台上、前方中央に、扉がある

暗転

1

音楽 1

照明、徐々に舞台を明るくしていく

西川、何かに囚われながら登場

扉の斜め後方で立ち止まる

扉があるのに、目に入らないかのよう

音楽 1、FO

西川、しばらく、その場に立っている。思考はその場にはない。

扉は目の前にあるが、目には入っていない

西川 ∴

西川、徐々に思考がその場に戻ってくる

西川 何だこれ。

え、何で。

西川、扉後方からドアノブをガチャガチャ動かす。開かない

西川 何で。

西川、辺りをキョロキョロ見渡す

西川 何。

西川、携帯を取り出す
電話をかけようとして、携帯を触るが、微妙に動きに迷いがでる
少し止まって、思い直したように電話する

西川 あ、もしもし。

俺。

おう、久しぶり。

元気だった。

おお。

俺も元気だよ。

え。

いや、特に用ってことでもないんだけど、ちょとさ。

いやいやいや、

うん、お前さ、今暇。

暇。暇って言えば暇。

まあ、みんなそんなもんだよな。

暇って言えば暇だし、忙しいつていへば忙しいよな。

いや、お前、今から出てくれるかなつて。

酒じゃない。酒じゃない。

こんな時間から飲まないよ。

出てくれる。

俺の家知ってるだろ。

そう。

近くの河川敷あるじゃん。

あるよ。

そこにいるんだけど、来ない。

特に話があるつてわけじゃないんだけど、うん、寒いよ。

いい年したおっさんが、河原で集まるつてな。

でも良いじゃん。

たまにはぞ。

それは来てからでぞ。うん、寒いよ。

今のやり取り、確かに寒いよ。

俺も思ってるから。

良いじゃん。来いよ。

忙しい。

お前さつき、暇だつて言つたじゃん。

うん。うん。うん。

まあ、だよな。

わかったわかった。
また今度。
じゃな。

西川、電話を切る

西川 今、俺の目の前には扉があります。
家はありません。部屋也没有。
扉だけがあります。
何かを区切っているわけでもなく、ただ、扉だけがあります。
その扉は、押しても開きません。
引いても開きません。
もちろん、スライドしても開きません。
開かずの扉があります。
扉の向こうには何があるんだろうか。
何もない。
ただ、扉の向こうの世界があるだけで、こちら側に何もないのであれば、あちら側も何も
ないのかもしれない。
∴
この扉は本当に存在してるんだろうか。
自分で勝手に創りあげてしまっただけじゃないんだろうか。
∴
この扉は本当に存在しているんだろうか。
∴

西川 こんなこと、電話で話せるわけねえよな。
寒いよ。
そんなこと、俺も思ってるよ。
俺にしか見えないんだったら、それこそ寒いよ。
∴

西川、退場する

音楽 2

照明、扉を残しつつ、暗転

2

照明、ゆっくりと舞台全体を照らす

舞台上に、西川がいる。人を待っているが、それ以上に意識は散漫で呆然と扉を司会
にいれながら待っている

西川の携帯に着信が入る

音楽2、FO

西川　もしもし。
え　いるよ。待ってるよ。
知らねえよ。どこだよ。
ああ、はいはい。
もっと下流のほうだよ。
うん。そうそう。
あ、見えた見えた。
俺、見えるだろ。
俺、手振ってるだろ。
だいぶ遠いから、連つてたらちよつと恥ずかしいけどな。
振ってるよ。
え　あれ、お前だろ。
何だよ。驚かすなよ。
おう。

西川、電話を切り、なんとなく、扉を触ったりする

少し経ってから、岡、登場

岡　おくす。
西川　おう。

西川、さりげなく、扉のほうへ移動

岡　∴
どうしたの。
西川　まあ。
岡　最近どうなの。
西川　え、まあ、普通。
岡は。
岡　俺も普通。
西川　そう。
岡　で、何。
西川　え。
岡　どうしたの。
西川　まあ。
岡　酒を飲むでもなく、こんな時間からおっさん二人が、河原でどうしたいの。
西川　∴

いや。

岡 キヤッチボールでもするのか。

西川 ちよつと待つて。ちよつと待つて。
何かおかしいと思わない。

岡 ::

西川 何でそんな普通なの。
確かに普通つて言つてだけど。
みんな言うけど、普通つて何なの。
そんなことを議論したくて呼んだ訳じゃないけど。
何かおかしいと思わない。

岡 ::

西川 ::

岡 ちよつと太つた。

西川 むしろ瘦せた。
そうじゃなくてさ。
これ、見えてないの。

岡 見えてるよ。
ドアだろ。

西川 扉だよ。

岡 どつちでも良いだろ。

西川 扉だよ。

岡 わかつたよ。
扉な。

西川 見えてるよね。

岡 見えてるよ。

西川 え、だつたら何で。
何でそんな普通なの。

岡 何。

西川 何でそんなに普通なの。

岡 どうしたいんだよ。

西川 え、何、お前にとっては普通の光景なの。
お前の人生において、こういうドアが、そこら中、いたるところに存在してんの。

岡 お前、今ドアつて言つたぞ。

西川 扉だよ。

岡 どつちでも良いだろ。

西川 扉。

岡 わかつたよ。

西川 で、どうなの。
こういう、扉 が、いたるところに存在してんの。

岡 そんなことないよ。

西川 でしょ。
だつたら、もっと驚かない。
驚くよ。
だつて、俺、驚いたし。

岡 何だよ、お前、何か面倒くさいな。

西川 何とも思わないの。

岡 待て待て待て。
落ち着けよ。

西川 ∴

岡 何だ。どうした。

西川 岡は、この扉を見て、何とも思わないの。

岡 ∴
お前から電話がありました。

西川 した。

岡 用件は、来てから。

西川 そう言った。

岡 来ました。

西川 ありがとう。

岡 歩いてくる途中から、お前と、そのドア、いや、扉が見えました。

西川 そうなのか。

岡 正確に言うと、扉なのか何なのかは、よく分からなかった。

西川 視力は。

岡 0.2.

西川 そりやそらだ。

岡 コンタクトしてるけどな。

西川 そうしてくれ。

岡 でも、お前と、何かが立ってるのは、分かった。

西川 うん。

岡 それ以上でも、それ以下でもない。

西川 何で。

岡 何で。

西川 何で。

岡 ええ。

どうして欲しかったの。

西川 じゃあじゃあじゃあ。

岡 何。

西川 俺はこの前、一人でここに来ました。

岡 何で。

西川 散歩。

岡 へえ。

西川 ちょうど1週間前だ。

岡 電話くれた日。

西川 その通り。

岡 とにかく、1週間前、俺は一人でここに来ました。

西川 はい。

西川 そしたら、この場所に、この扉が立っていました。

岡 そうなの。

西川 気になりました。

岡 気になるわな。

西川 ちよつと驚きました。

岡 ちよつと驚くな。

西川 で、あなたに電話をしました。

岡 俺は断りました。

西川 次の日も、次の日も、この扉はここにありました。

岡 確認しに来たの。

西川 気になって。

岡 暇だな。

西川 暇といえば暇なんだよ、人は。

岡 正しい。

西川 で、今日まで、この扉はここにあつたわけです。

岡 なるほど。

西川 で、また、あなたに電話しました。

岡 来ました。

西川 俺の気持ちは理解できましたか。

岡 俺のリアクションが薄いと。

西川 そうですね。

岡 かなり不満です。

西川 :

岡 :

西川 知らねえよ。

岡 俺は、お前がそこに置いたのかと思つたんだよ。

西川 なんで、俺がそんな暇なことするんだよ。

岡 お前暇なんたら。

西川 忙しいといえば忙しいんだよ。

岡 俺は、あれだよ。

西川 また、変わったことしてんなくつて、冷めた目で見てただけだろ。

岡 状況がわかんないもの。

西川 待て待て待て。

岡 何、その冷めた目つて。

西川 お前、そういう風な感じで俺のこと見てたの。

岡 多かれ少なかれな。
西川 どっちだよ。
多かれ少なかれって、どっちだよ。どのくらいだよ。
岡 わかった わかった。
で、なんでここに扉があるんだよ。
西川 知らない。
岡 誰が置いたんだよ。
西川 知らない。
岡 いつからあるんだよ
西川 知らない。
岡 ∴
何か知つとけよ。
西川 ∴
岡 え 何。
どした。
西川 本当だな。
岡 何だよ。
西川 本当だよ。
俺、何も知らないよ。
岡 どうした。
西川 ∴
帰るか。
岡 は。
西川 帰ろう。
岡 待て待て待て。
どうした。
突然、何があった。
西川 呼び出してごめんな。
飲みにも行くか。
岡 待て待て待て。
どうした。
何で、急にそんな下がった。
西川 帰るか。いや、帰ろう。(明るく)
岡 言い方変えても、フオローになってないから。
下がったぞ。
西川 下がってはないよ。
岡 下がったよ。
西川 下がってないって。
冷静になっただけだって。
岡 ∴

西川 実際、なんで俺は、こんなにテンション上がってたんだ。
そう思ったんだよ。
何かさ、この扉見つけて、何かわかんないけど、テンション上がったんだよな。
岡 良いことじゃねえか。
西川 ::
岡 良いことだよ。
うちら位の年で、無邪気にテンション上がるのは、良いことだよ。
西川 ::

岡、扉の方へ行き、扉を開けようとする

岡 開かねえの。
西川 開かないんだよ。
岡 何で。
西川 鍵が掛かってんだろ。
岡 ::
西川 ::
岡 おもしれえな。
西川 だろ。
別にさ、その扉が開かないからって、何の不都合もないわけじゃない。
でもさ、気にならない。
岡 なる。
この扉が開いたからって、どこかにいけるわけじゃないしな。
西川 分かんねえぞ。
どっかに繋がってるかもしれない。
岡 どこでもドア。
西川 そう。
岡 ::
なんだ。
西川 そうだよ。
岡 認めないぞ。
西川 認めろつて。
岡 いや、認めない。
絶対にそんなことはない。
西川 認めろつて。
岡 ::
西川 ::
岡 テンション上がってる。
西川 よっしゃ。
岡 待て待て待て。

冷静になるらう。

西川 ：

岡 誰かが見たら、どう思うと思う。

西川 おつさん二人が、河原に不意にある扉の前ではしゃいでる。

岡 そう。

西川 ちよつと気持ち悪い。

岡 ちよつとじゃないと思うぞ。

西川 かなり気持ち悪い。

岡 そう思うぞ。

西川 ：

岡 ：

ま、いつか。

別に俺らが楽しただけだしな。誰に迷惑かけてるわけじゃないしな。何かあれだよな。

年取つて、そういうことに怯えすぎてるよな。

西川 そうかもな。

別に、気持ち悪かねえよな。うちら。

岡 野球やつてんのと一緒だよ。

西川 確かに。

岡 でもよ、お前さ、どこ行きたい。

西川 え。

岡 この扉が、どこでもドアだとしたら、どこに行きたい。

西川 ええ。

岡 ちよつと待て。

お前今、どこでもドアな訳ないだろ。つて思つたる。

西川 いやいやいや。

岡 ついて来い。今度は俺のテンションについて来い。

西川 わかった。

岡 どこ行きたい。

西川 ええ。

岡 どこ行きたい

西川 え お前は。

お前はどこ行きたい。

岡 どこだろうな。

ええ、どこだろうな。

西川 な。ぱつと出てこないよな。

岡 そうやつて考えたら、のび太君凄えな。

迷いがないつてことだよな。

確実に、扉の先があるわけだろ。

西川 そうだな。

岡 のび太君、凄えな。
な。
よし、俺来週、知り合いの鍵屋連れてくる。
西川 え。
来週もまた来るの。
岡 来るだろ。
きつとあるだろ。
西川 まあ、あるだろうな。
1週間は、あり続けたからな。
岡 来週、鍵屋連れてくるから、開けてもらうから、考えを決めとけ。
西川 え。
岡 どこに行きたいか。
西川 あ、ああ。
岡 俺も考えを決めとくから。
西川 ∴
岡 ∴

二人、笑う

西川 俺ら、何マジになってんだろうな。
岡 本当だよ。
でも、マジで来週連れてくるから。
西川 マジで。
岡 知り合いだから大丈夫。
西川 マジで。
岡 マジで。
西川 まあ、良いけども。
岡 ∴
西川 でもあれだな。
俺は、どこに行きたいのかな。
岡 ∴
考えてみよう。
西川 そうだな。
岡 ∴
西川 岡、∴、
岡 何。
西川 帰るか。
岡 ∴だな。
西川 帰ろう。
岡 おう。

音楽 3

西川、岡、雑談をしてる雰囲気、退場

照明、扉を残しつつ、暗転

3

照明、ゆっくりと舞台全体を照らす。全体的に怪しげで、暗め

矢野、軽快に登場

扉を開け、通り抜けて、退場

その行程、すべて楽しげ。

4

照明、シーン3から明るくなる

西川、登場。扉に近づくまでは、どこか虚無的に、扉を見て切り替えて、明るめの表情に

音楽 3、FO

西川、扉を開けようと試みる。開かない。

扉の前後に行つて、その先を見るような感じで動く

しばらくして、岡、近藤が登場。岡が前、後ろに近藤。

西川は気づかない

岡 西川。

西川 おう。

::

近藤 こんにちは。

西川 あ、こんにちは。

岡 この前言った、鍵屋さん。

西川 鍵屋さん。

鍵屋さん。

あ、どうも、よろしくお願ひします。

近藤 鍵屋です。

西川 あ、いや、何か、想像してるのと違うというか、まあ、特に想像はしてなかつたんですけど、驚いてます。すみません。

近藤 いえ。

岡 最近の鍵屋さんはお洒落なんだよ。

西川 そうなの。

岡 当たり前だろ。
西川 当たり前なの。
岡 当たり前だよ。
西川 当たり前って、どの辺りから当たり前なんだ。
岡 それはその人によるだろ。
西川 お前、言ってること無茶苦茶だぞ。
まあ、あんまり行くことないからね。
最近の鍵屋さん、お洒落なんだ。
近藤 そうですね。
西川 そうなんだ。
岡 そうだよ。
じゃあ、早速見てもらえます。
近藤 あ、はい。

近藤、扉を触ったり、鍵穴を見たり
西川、岡は、そんな近藤を黙って見守る
近藤、不安そうな顔で岡の方を見る
岡、無言で頷く
近藤、真剣な表情で西川を見る
西川、緊張した表情で岡を見る
近藤、再び、鍵穴を見たり

近藤 あの〜。
西川 はい。
近藤 :
西川 :
近藤 無理です。
西川 む、無理ですか。
近藤 はい。
無理です。
西川 それは、開かないってことですか。
近藤 はい。
西川 え。
近藤 開きませんね。
西川 て、そうですか。
そういうこともあるんですね。
近藤 そうですね。
西川 そっか。
近藤 すみません。
西川 いや。

近藤 ・・
西川 ・・
岡 まあ、しょうがないよ。
そういう時もあるよ。
西川 まあ、そうだな。
近藤 本当に、すみません。
西川 いえいえ。
岡 せつかぐだし、天気もいいし、座ろうよ。
西川 え。
岡 いい天気だよ。
西川 そうだな。
岡 座ろう。
西川 え。いや、でも、
近藤 そうですね。

近藤、扉の下手側に座る
それを見て、岡、西川も座る
扉の下手側に、岡、近藤、上手側に西川

岡 お前、行きたいと決まった。
西川 え。
岡 この前ね、話してたんですよ。
もしこの扉が、どこでもドアだとしたら、どこに行きたいかって。
不思議とね、いいおつさん二人が、ぱつと決められないんですよ。
行きたい場所。
鍵屋さん、どっか行きたい場所あります。
近藤 ・・
そうですね。
・・
そう言われると、すぐに思い浮かばないですね。
開けたら行きたい場所にいけるなら、すごい便利はずなのに、何ですかね、ぱつと思いつかないもんですね。
岡 そんなもんなのかもしれないですね。
みんな。
日々急いでるはずなのに、急いでるものが何なのか分からない。
西川 どうした、お前。
何で、ちよつと格好つけてんだよ。
岡 格好つけてねえよ。
西川 格好つけてるよ。
お前、昔からそういうところあるよな。

岡 ないよ。
西川 あるよ。
岡 ないよ。
西川 あるつて。
岡 ないつて。
西川 ねえ。
近藤 え。
西川 鍵屋さんも思ったでしょ。
ちよつと格好つけてるなあつて。
近藤 いや、
岡 そんなことないよね。
近藤 いや、あの、
西川 なんかなあ。
岡 お前な。
近藤 あの、
お二人は決まったんですか。
行きたいところ。
岡 そうだよ。
お前、決まった。
考えとけて言つたじゃん。
西川 なせ上からものを言う。
岡 言つてないよ。
西川 言つてたよ。
岡 言つてないよ。
西川 言つてたつて。
岡 言つてないで。
西川 鍵屋さんも思ったでしょ。
上からだなあつて。
近藤 いや、
岡 そんなことないよね。
近藤 いや、あの、
西川 なんかなあ。
岡 お前な。
近藤 あの、天気も良いので、… 朗らかに。
西川 …
岡 …
西川 そうですね。
岡 ですね。
近藤 お二人は、行きたいところ、決まったんですか。
西川 そうですね、…

岡 お前は。
朗らかに。
西川 あなたは。
岡 朗らかつて、そういうことなのか。
西川 わかんないけど。
岡 俺はさ、…アメリカ。
西川 は。
何だそれ。
岡 アメリカかな。
西川 アメリカのどこだよ。
岡 わかんねえ。
西川 何だそれ。

岡、寝転がる。

岡 お前は。
西川 え、何、終わり。
岡 うん、終わり。
お前は。
西川 何か腑に落ちねえな。
ねえ。
近藤 そうですね。
岡 アメリカつて言ったら、アメリカなんだよ。
良いじゃん。
俺はそう思ってたんだから。
近藤 ∴
西川 とりあえず言った感、すごくない。
ねえ。
近藤 そうですね。
岡 ちゃんと言ったじゃん。
お前の番、お前の番。
西川 なんかなあ。

西川、立ち上がる

西川 そうだな。
俺さ、結構まじめに考えたんだよ。
何かさ、グサツとこなかった。
俺はどこに行きたいんだろらなあつて。
俺は行きたい場所も、すつと言えない人間になってたんだなあつて。

岡 俺はさ、グサツときたんだよ。
西川 お前も格好付けてんじゃん。
西川 格好つけてるよ。
岡 駄目。
西川 そう言われると、何も言えないけど。
西川 駄目ですか。
近藤 良いと思います。
西川 ありがとございませう。

岡 ::
結構まじめに考えたんだよ。
毎日ここ来てさ。
岡 毎日来てたの。
西川 毎日来てた。
岡 暇だな。
西川 忙しいよ。
あの子、ちよいちよい邪魔しないでくれる。
陶酔させて、自分に。

岡 悪い。
西川 ::
俺は、いつたい、どこに行きたいのか。

岡 ::
俺さ、2年前に行きたいなつて。
2年前のここに、ここにつて言うが、家に、自分ん家に、行きたいなつて。
岡 ::
近藤 ::
西川 ::

岡、起き上がり

岡 タイムマシンじゃん。
西川 え。
岡 それじゃ、タイムマシンだろ。
西川 え。
岡 根本からずれてるよ。
ねえ。
近藤 そうですね。
西川 ::
岡 どこでもドアじゃなくなってるから。
タイムマシンだろ。
時間遡つちや駄目だろ。

西川 本当だ。

岡、近藤、呆れつつ、優しい顔で、西川を見守る

西川 本当だ。

俺のこの1週間は何だったんだ。

岡 考えすぎて、話が曲がっちゃったな。

西川 うん。

岡 まあ、しゃあないな。

西川 うん。

岡 もう1週間、考えてみようか。

西川 うん。

岡 まあ、俺ら来ないと思うけど。

西川 え。

岡 そりやそうたる。

西川 え。

岡 そんなに暇じゃないよ。

西川 俺だって、そんなに暇じゃないよ。

岡 どつちでも良いよ。

西川 え。本当に来ないの。

岡 来ないよ。

西川 鍵屋さんも。

近藤 すみません。

西川 え。

言つとくけど、俺、考えるよ。きつと考えるよ。

岡 良いんじゃないか。

西川 知りたくない。

岡 特には。

西川 俺が1週間考えて、どこに行きたいって思ったか、知りたくない。

岡 そんなでも。

西川 鍵屋さんも。

近藤 そんなには。

西川 え。

嘘。

現代社会。

岡 は。

西川 お二人とも現代社会に生きておられますね。

岡 何だよ。

西川 他人に興味はございせんか。

岡 からむなよ。

近藤 気にしなくて良いから。
西川 はい。
西川 あく、嘆かわしい。あく、嘆かわしい。
岡 嘆かわしい。
岡 気にしなくて良いから。
近藤 はい。
西川 決めた。
このドアで、お前と鍵屋さんを迎えに行く。
決めました。
岡 ばつて、お前と鍵屋さんのところに行って、連れて、ここにきて、どりに行きたいか言う。
俺らのところ来るって、言っちゃったじゃん。
俺らのところに着ちやつた時点で、俺らに行きたいと言う必要ないじゃん。
西川 でも言う。
岡 何だそれ。
西川 でも言う。
岡 大体それは、どこでもドアじゃないから。
どこでもドアだったらって話だから。
西川 でも言う。
岡 お前な。
西川 鍵屋さんにも言うから。
近藤 はあ。
岡 気にしなくて良いから。
近藤 はい。
西川 おい。
岡 何。
西川 さつきから思ってたんだよ。
岡 何が。
西川 この立ち位置。
岡 何がだよ。

西川、扉を境に、上下に、線があるようにアピール

西川 この扉から、そっちが、現代社会。
で、こっち側が、…こっち側が、…俺。
岡 俺って何だよ。
何社会だよ。
西川 …俺社会。
岡 俺社会の方が、他人に一切興味ないだろ。
西川 あ。
岡 何だよ。

西川 あのさ、俺、すごいこと思いついた。
岡 は。
話の流れどうなったんだよ。
西川 俺、すごいこと思いついちゃったよ。
岡 お前の頭の中、どうなってんだよ。
西川 この扉さ、向こうからの出口なんだよ。
岡 は。
西川 向こう側からしか開かないんだよ。
岡 おい。
大丈夫か。
西川 そうだよ。
向こう側からしか、開けることができないんだよ。
だから、もしかしたら、今、ガラツと開いて、人が出てくるかもしれない。
岡 ガラツて、引き戸になっちゃってるぞ。
西川 こつちから開けようとしても駄目なんだよ。
何かの必要性があつて、その時に、向こうから出てくるんだよ。
な。
そうだよ。
そうなんだよ。
俺、すごいこと思いついたぞ。
岡 行こうか。
近藤 え。
岡 飯でも食いに行こうか。
わざわざ来てもらったし。
近藤 あ、
岡 ね。
近藤 はい。
西川 ちよつと待つて、俺のこと無視。
岡 行こう。

岡、近藤、立ち上がる

西川 俺のことは無視ですか。

岡、近藤、退場しようとする

西川 おゝい。

岡 ::

西川 岡ゝ。

岡 ::

待つてれば良いじゃん。
西川 何を。
岡 向こうから来る人を。
西川 お前たちは。
岡 飯食いに行く。
西川 俺は。
岡 向こうから来る人を待つ。
西川 不憫だと思わないか。
岡 何が。
西川 俺が。
岡 何で。
西川 何で。
岡 あんばんでも買ってきてやろうか。
西川 不憫だね。
俺は不憫だね。
物實的にも 精神的にも不憫だね。
岡 ::
西川 ::
岡 お前も行く。
西川 途中まで一緒に帰る。
岡 何でだよ。
一緒に飯食えば良いじゃん。
西川 家で用意してるから。
岡 あ、なるほどな。
西川 でも、置いていかれるのは、嫌だなと。
岡 いつ開くかわかんないぞ。
西川 だから余計な。
岡 ::
西川 良い、気にするな。
岡 ::
西川 帰ろう。
岡 よくわかんないけど。
西川 鍵屋さんも、わざわざ、ありがとございしました。
近藤 いえ。
西川 帰ろう。
岡 ::

西川、二人を促し、退場
照明、暗くなる。夜つばい雰囲気
音楽 4

音楽 4 F. O.

袖から大嶋が声だけ

大嶋 お疲れ様でした。
大丈夫ですって、ちゃんと帰れますって。
大丈夫です。
そんなに酔ってないですって。
ちゃんと帰りますから。
大丈夫です。寝ませんから。家で寝ます。

大嶋、登場。酷く酔っている

舞台後方で

扉に気づき

大嶋 先輩。
あれって、この前の芝居で使ったやつですよ。
何で、こんなところに置いてんですか。
え。
はい。ちゃんと帰ります。
お疲れさました。

大嶋、扉に近づく

大嶋 狂ってんなら。
さすがだよな、狂いすぎだろ。
何でここに置こうって思ったんだろ。

大嶋、その場に座る

大嶋 いや、でも良いな。
おもしろい。この画おもしろい。

大嶋、寝転がる

大嶋 違和感がありつつ、なんとなく納得できちゃら。
おもしろい。

大嶋、あくび

大嶋 良い。

大嶋、寝る

照明、暗転

照明、明るくなる

大嶋、寝返りをうったようで、うつぶせ状態で寝ている。
まるで、扉から出てきて、倒れたかのよう

西川、登場

いつものように、何かやりきれないような表情
大嶋に気づく

西川 え。え。

本当に、出てきたの。

マジで。

え。え。

出てきたの。

大嶋、目を覚ます

大嶋 あ、寝てた。

西川 ::

大嶋 あ、どうも。

西川 どうも。

大嶋 ::

西川 ::

大嶋、立ち上がり、服をのこみを払ったり等

西川 つかぬ事をお聞きしますが、

大嶋 ::

西川 扉から、出てきたんですか。

大嶋 え。

西川 え。

大嶋 ああ、::はい。

西川 本当に。

大嶋 え。

西川 …まあ。
大嶋 マジか。
大嶋 マジか。

西川、何かを考えるように、うろろこと歩き回る

西川 その扉は、あなたのものですか。
大嶋 いや、俺のものでは。
西川 あなたのものではないんですか。
大嶋 そうですね。
厳密に言えば、私も関係していますが、みんなのものって感じですかね。
西川 みんなと繋がってるんですか。
大嶋 繋がってる。
え。
西川 いや、良いです。
大嶋 あの、
西川 そうですね。
扉は閉まっても、繋がってるんですよ。
扉ですもんね。
仮に閉まっても、開かなくても、そこは繋がってるんですよ。
大嶋 ……
西川 ……

大嶋、拍手する

西川 ……
大嶋 すごい。
おじさん、すごい。
素晴らしいことに気づきましたね。
西川 素晴らしいこと。
大嶋 よく、サッカー日本代表とかで、代表の扉は誰にでも開いてるって、言うじゃないですか。
西川 ちょっと分かりません。
サッカー詳しくないんで。
大嶋 言うんですよ。
西川 はい。
大嶋 でも、それって、おかしくないですか。
西川 そうなんですか。
大嶋 そうでしょ。
誰にでも開いてるわけじゃないじゃないですか。
西川 そうなんですか。

大嶋 そろでしょ。
だったら、俺にでもなれるわけじゃないですか。
西川 あなたサッカー選手なんですか。
大嶋 いえ。
西川 じゃあ、サッカーの日本代表は無理なんじゃないですか。
大嶋 ね。
そろでしょ。
誰にでもじゃないでしょ。
あくまでも、サッカーやってる人に限るわけですよ。
選ばれてる人に限られてって事じゃないですか。
西川 ちよつと言ってる意味が分からないですけど。
大嶋 俺もです。
西川 ∴
大嶋 ということで、俺は帰ります。
西川 え。

大嶋、退場しようとする

西川 ちよつと待ってください。
大嶋 はい。
西川 扉から帰るんじゃないんですか。
大嶋 まさか。
普通に電車使つて帰りますよ。
西川 そうなんですか。
大嶋 え。
そりやそろでしょ。
西川 はあ。
大嶋 それじゃあ。
西川 ∴はい。

大嶋、退場しようとする

西川 ちよつと待ってください。
大嶋 何ですか。
西川 ∴
大嶋 ∴
西川 ちよつと話しませんか。
大嶋 え。
西川 いや、急ぎの用とかあれば、別に良いんですけど。
大嶋 ∴

西川 　　：
大嶋 　　良いつすよ。
　　　　　話しましょう。
西川 　　：
大嶋 　　：
西川 　　現代社会のことを、どう思いますか。
大嶋 　　え。
西川 　　冗談です。
大嶋 　　はあ。
西川 　　：
大嶋 　　：

微妙な間

西川 　　すみません。
大嶋 　　え、何がですか。
西川 　　あ、いや、話しましょうって言った割りに、何も話すことが思い浮かばなくて。
大嶋 　　ああ、大丈夫です。
　　　　　でも、おじさんは、何で俺と話したかつたんですか。
西川 　　西川です。
大嶋 　　え。
西川 　　私の名前。
大嶋 　　ああ。
西川 　　何ですかね。
　　　　　ちよつと分からないです。
大嶋 　　おじさんも相当ですね。
西川 　　おじさん、相当ですか。
大嶋 　　面白いです。
西川 　　それは、ありがとうって思えば良いんですかね。
大嶋 　　良いと思います。
西川 　　：
大嶋 　　：
西川 　　話したいと思うんですけど、多分、何を話して良いか分からなくなる。
　　　　　そうになると、本当は話したくないんじゃないかなって。
　　　　　話すことがないんじゃないかって、話したくない。
　　　　　でも、話さないといけない。
　　　　　でもそれは、話してるんじゃないかって、ただ言ってるだけなんです。
　　　　　一方的に、どこにも向かわず、発してるだけ。
　　　　　発してるんじゃないかって、ここに留まつてるだけ。
大嶋 　　：

西川 ・・
大嶋 何の話ですか。
西川 おじさんの話ですね。
大嶋 おじさん、面白いですね。
西川 ・・ありがとうございます。
大嶋 どうなんですか。
まるで、よく分からないですけど、そんなに深く考えなくて良いんじゃないですか。
西川 おじさんは、深く考えたほうが良いと思っています。
大嶋 噛み合わないですね。
西川 噛み合わないんです。
大嶋 ・・
西川 ・・
大嶋 話題変えません。
西川 そうですね。
大嶋 まあ、今のが何の話題かと言われれば、それはそれで微妙な感じですけどね。
西川 ・・そうですね。
大嶋 ・・
西川 ・・
思っただんですけど、とりあえず、座りましょうか。
大嶋 ああ、そうですね。

二人、座る

西川 ・・
ドラえもんのは好きですか。
大嶋 え、こりやまた、ずいぶん楽になりましたね。
西川 ありがとうございます。
大嶋 いや。
西川 あ、違います。
大嶋 良いんですけど。
西川 ・・
ドラえもんのは好きですか。
大嶋 あ、まあ。
普通ですね。
西川 なるほど。
大嶋 おじさんは。
西川 おじさんも普通ですね。
大嶋 ・・
西川 みんな普通って言いますが、普通って何なんですかね。
今日、おじさんとあなたは、初めて会ったわけじゃないですか。

大嶋 はい。

西川 この二人の間での普通は共有できることなんですかね。

大嶋 ああ。

西川 すみません、忘れてください。

大嶋 はい。

西川 ∴

のび太君のことは好きですか。

大嶋 え。

西川 どうですか

大嶋 ∴あんまり好きじゃないですね。

西川 のび太君のことを凄くと思いますか。

大嶋 ああ、面白い視点ですね。

なるほど。

のび太君が凄いか。駄目なのか。

駄目なようで、あれほど助けてもらってることは、逆に凄くとも言えますもんね。

西川 ああ。

大嶋 どうなんでしょうね。

凄く感じがしますね。

西川 そういう見方もあるんですね。

大嶋 おじさんはどう思うんですか。

西川 そうですね。

おじさんは、そういう助ける、助けられるじゃなく、違う視点で見ましたね。

大嶋 違う視点。

西川 はい。

大嶋 どんな視点ですか。

西川 厳密に言えば、おじさんが思ったわけじゃなくて、おじさんの友達のおじさんが言ったことと同調してるんですけど

大嶋 おじさんの友達のおじさん。

西川 はい。

おじさんの、昔からの友達なので、そいつもおじさんなんです。

大嶋 はい。

西川 結論から言うと、凄くというようになります。

大嶋 はい。

西川 理由としては、ぶれないところです。

大嶋 ぶれない。

西川 は。

大嶋 どういうことですか。

西川 ドラえもんから、道具を渡されますよね。

大嶋 はい。

西川 普通、道具を渡されて、何の迷いもなく使えます。

大嶋 ああ、確かに。

西川 何の躊躇もなく、むしろ積極的に使うわけです。
しかも毎回毎回。

大嶋 ああ。

西川 それって凄いことですよ。

大嶋 ぶれてないですね。

西川 ぶれてないんですよ。

大嶋 凄いかもしれない。

西川 おじさんは、そういう視点で、凄いと思ったんですよ。

大嶋 何となく納得できます。

西川 ありがとうございます。

大嶋 ちなみにですけど、おじさんと、友達のおじさんは、一人でそういうことを語り合ってたんですか。

西川 もっと端的に話したけなんですけど、おじさんが勝手に深く考えたんですね。

大嶋 深く考えるの、好きですね。

西川 そうなのかな。
そうじゃないと思ってたんですけどな。

大嶋 そっち系だと思いますよ。

西川 そうなんですかね。

大嶋 だと思いますよ。

西川 最近、深く考えがちなんですよ。

大嶋 そうなんですか。

西川 はい。

大嶋 ː
よくわかんないですけど、誰か助けてくれるんじゃないですか。

西川 のび太君のように。

大嶋 そうですね。

西川 最近、本当に偶然なんですけど、助けられてる気がします。

大嶋 ほう。

西川 聞いてもらって良いですか。

大嶋 良いですよ。

西川 時間大丈夫ですか。

大嶋 大丈夫ですよ。

西川 助けられてる気がするって言ったじゃないですか。

大嶋 はい。

西川 本当に偶然だったんですよ。

大嶋 そう言っていましたね。

西川 おじさんの友達のおじさん、名前を、岡って言うんですよ。

大嶋 岡おじさん。

西川 岡おじさん。

で、おじさんの娘が、恵理唯っていうんです。

大嶋 エリ。

西川 エリイ。

大嶋 エリイ。

西川 伸ばすんですね。

大嶋 娘の名前なんで。

西川 大事ですよ。

大嶋 はい。

西川 エリイ。

大嶋 ね。

西川 凄く偶然でしょ。

大嶋 ：

西川 ：

大嶋 ごめんなさい。

西川 わかんない。

大嶋 当たり前のように偶然でしょ。って言われましたけど、ぜんぜんわかんないです。

西川 恵理唯に教えようと思ったんですけど、できなかつたんです。

大嶋 で、岡おじさんに電話したんです。

大嶋 ：

西川 ああ。

大嶋 はいはいはい。

西川 電話帳。

大嶋 そう言ってます。

西川 そうは言ってませんよ。

大嶋 俺、だいぶ察しよかつたと思いますよ。

西川 偶然たつたんですけど、助けられた感じがします。

大嶋 ：

西川 良かつたですね。

大嶋 はい。

西川 ：

大嶋 ：

西川 帰って良いですよ。

大嶋 え。

西川 ありがとございました。

大嶋 マジで。

西川 マジで。

大嶋 え 本当に。マジで。

西川 本当に。マジで。

大嶋 おじさん、凄くね。

西川 そうですか。

大嶋 凄いよ。
まあ、嫌いじゃないですけどね。

西川 :

大嶋 そうですね。
じゃあ、帰りますか。

大嶋、西川、立ちあがる

大嶋 まあ、楽しかったです。

西川 おじさんもです。

大嶋 じゃあ、帰ります。

西川 ありがとございます。

大嶋 じゃあ。

大嶋、手を差し出す

二人、握手。さらに、大嶋が西川をハグ

大嶋 頑張つて。

大嶋、客席側に退場

西川 あ、そうだ。

大嶋 何ですか。

西川 おじさんと、あなたと、そんなに年違わないですよ。

大嶋 ㊦です。

西川 私、おです。

大嶋 おじさん、また。

西川 また。

:

大嶋、退場

西川、扉を見る。心なしか、少しすつきりした顔になっている

6

照明、うつすらとオレンジ

近藤、登場。舞台後方で立ち止まる

西川は気づいていない。後方から

近藤 西川さん。

西川　　：
あぁ、鍵屋さん。
近藤　　こんにちは。
西川　　こんにちは。
あ、この前はどうも。
近藤　　いえ。

近藤、舞台前方に出てくる。下手側に立つ

近藤　　毎日、来てるんですか。
西川　　そうですね。
散券がてら。
近藤　　良かったです。
西川　　：
近藤　　来て。いなかったら、何かショックだなんて。
西川　　あぁ。
近藤　　あのう。
西川　　はい。
あ、そうだ。
近藤　　はい。
西川　　出てきましたよ。
近藤　　え。
西川　　この扉から。
近藤　　え。
西川　　この扉から、向こう側から。
近藤　　嘘。
西川　　本当に。
近藤　　それはさすがに。
西川　　おじさんが出てきました。
近藤　　おじさんが。
西川　　俺も、おじさんですが、おじさんが出てきました。
近藤　　はぁ。
西川　　でも、帰りは電車で帰るそうです。
近藤　　扉を使わないんですか。
西川　　当たり前だそうです。
近藤　　当たり前なんですか。
西川　　当たり前です。
嘘ですから。
近藤　　え。
何の話ですか。

ちよつと、意味が。

西川 扉から出てきたつてのは、嘘です。
大方、酔っ払つて、ここで寝てしまつたんでしょ。
でも、出てきて、倒れたように見えました。
それが、ちよつとだけうれしい気持ちにさせてくれて。
軽薄そうでしたが、悪い人じゃないのは分かりました。
さつきまで、少し話をして、…、何か、…良かったです。

近藤 ::

西川 ::

近藤 あ、鍵屋さんは、どうしてまだ。
あ、はい。
::

西川 私は、嘘ついているので、…それも何かなあつて。

近藤 ::

近藤 気付いてるとは、思うんですけど、

西川 ::

近藤 私、鍵屋さんでは、ないです。

西川 ::

近藤 鍵屋さんじゃないですよ。
西川 そうなんですか。
近藤 気付いてなかつたんですか。
西川 全然。
近藤 信じてたんですか。
西川 完全に。
近藤 ええ。
西川 ええ。
近藤 え、だつて、おかしいじゃないですか。
道具も何もないんですよ。
西川 でも、いろいろ見てたじゃないですか。
近藤 見てみたけど。
それは、何となく。
最後は、気功送つてたじゃないですか。
西川 そういふものなのかなつて。
近藤 そんなわけないでしょ。
西川 完全に騙された。
近藤 こんな鍵屋さんいないでしょ。
西川 そんなに鍵屋さんに行かないですもん。
近藤 それはそうですけど。
西川 そうなの。
近藤 いや、こういうものなんですかね。

西川 何がですか。

近藤 騙されるときつて。

西川 ::

近藤 心からそうあつて欲しいと思つたら、騙されちやう。

西川 ::

近藤 普通に考えたら、おかしいことなのに、おかしいことすら、正しいことと思えちやう。

西川 盲目的な。

近藤 はい。

西川 思い込み的な。

近藤 切実な思い込み。

西川 ::

そうですね。

まあ、実際騙されちやつてますからね。

その通りとしか言いようがないですね。

近藤 何か、ごめんなさい。

西川 あ、いやいや。

近藤 本当に、ごめんなさい。

西川 大丈夫です。大丈夫です。

まあ、驚きましたけど、それによつて、俺に何か重大なことを引き起こしたわけじゃないし。

近藤 まさか、信じてると思わなかつたんで。

西川 でも、それ言いに来たんでしょ。

近藤 もし、万が一と思つて。

西川 万に一つでしたね。

近藤 びっくりです。

西川 俺もです。

近藤 ごめんなさい。

西川 本当に、大丈夫です。

ていうか、むしろ、鍵屋さんじゃなかつたとしても、俺にとっては、楽しい時間でしたよ。

そういう意味では、感謝です。

近藤 ::

西川 さつき言つてた、扉から出てきたおじさんなんですけど、話してて、…助けられたんです。

いろんなことに気付かせてもらえました。

近藤 ::

西川 今も。

普通に考えたら、おかしいことなのに、的なこと言つてたじゃないですか。

近藤 ::

西川 言つてたんですけど。

普通のあいまいさつていうか、弱さつていうか、そういうことを、考えさせられます。

近藤 ::

西川 最近、深く考えがちなんですよ。
ていうか、あなた誰。

近藤 :

西川 鍵屋さんじゃないなら、あなたは誰なの。何なの。
そままず考えないといけないですよね。

近藤 あ、私、近藤と言います。

西川 あ、近藤さんね。
近藤さんって誰だよ。
俺、知らないよ。
知らなくはないよ。会ってるし。
中身的な。中身じゃないな。所属的な、由来的な。

近藤 どの誰かってことですよね。

西川 そう。

近藤 え。

西川 え。

近藤 え。

西川 岡と一緒に来ましたよね。

近藤 そうですね。

西川、動く。近藤、西川と一定の距離を保つように、ぐるぐると動く

西川 え。俺はひよつとして、見てはいけないものを見てしまった。
見たんじゃない。見せられた。
それが意味することは。

近藤 そんなことないですよ。

西川 だって。

近藤 だって、

西川 何だよ。
嘘でよかったのに。

近藤 西川さん。

西川 鍵屋さんで良かったのに。
何でわざわざ言いに来たんですか。

近藤 西川さん。

西川 :

近藤 西川さん。

西川 :

近藤 落ち着いてください。

西川 落ち着いてられません。

近藤 深呼吸でもしましょうか。

西川 深呼吸しません。
近藤 大丈夫だよ。

犬や猫を呼ぶような感じで、舌を嚙らす

西川 ∴
近藤 大丈夫だよ。
西川 ∴
近藤 大丈夫だよ。落ち着こう。
西川 ∴
近藤 深呼吸しようか。
西川 ∴
近藤 落ち着いた。
西川 落ち着いた。
近藤 私の話が聞ける。
西川 聞ける。
近藤 よよし、良い子だ。
よよし、座ろうか。

西川、座る

近藤 西川さん。
西川 はい。
近藤 よし。
まず、私と岡さんは、西川さんが思ってるような関係ではありません。
西川 岡の浮気相手。
近藤 違います。
西川 良かった。
近藤 じゃあ、どういう関係なのか。
西川 そうです。
近藤 岡さんの奥さんは知っていますか。
西川 何度か見たことがある位ですが、知っています。
近藤 私は、その奥さんの妹です。
西川 ∴
岡の、義理の妹。

西川、動揺しようとする

近藤 待て。
西川 はい。

近藤 よし。
近藤 まあ、元ですが。
西川 はあ。
元、義理の妹。
近藤 はい。
私と岡さんは、残念ながら、何もあります。
西川 そうなんですか。
そうなんだ。
いや、別に残念とは思ってませんよ。
近藤 残念に思ってたのは、私の話です。
西川 はあ。
え。
ちょっと待ってください。
え、岡、離婚したんですか。
近藤 聞いてないんですか。
西川 初耳です。
いつ。
近藤 1ヶ月前くらい。
西川 最近の話じゃないですか。
近藤 最近の話です。
西川 え、何で。
何で、何も言わなかったんだ。
え、で、元、義理の妹。
近藤 はい。
西川 ちょっと待ってください。
近藤 はい。
西川 立って良いですか。
近藤 良いですよ。
西川 立って、ちょっと動き回っても良いですか。
近藤 良いですよ。

西川 立ち上がる。

西川、近藤、ぐるぐると舞台を回る

止まる。

座る。西川、近藤の順

近藤 落ち着きましたか。
西川 まだ、いろいろ回ってます。
近藤 理解に対する処理速度は、あまり速くないんですね。
西川 深く考えるんですけどね。

近藤 私、話しても良いですか。

西川 私は、がんばります。

近藤 岡さん。

1ヶ月前に、私の姉と離婚しました。

離婚の原因は、姉の浮気です。

西川 ::

近藤 岡さんは、仕事も忙しいし、姉は専業主婦だったので、浮気をしやすい環境といえば、し
やすい環境でした。

岡さんは、ちよつと前に、姉の浮気に気付きました。

そして、姉を問い詰めました。

そして、離婚しました。

西川 ::

近藤 私は、姉が許せませんでした。

昔から、姉のことが、あまり好きじゃないというのがあります。

::

それよりも

西川 岡は、辛くないんですか。

近藤 おそらく、辛いと思います。

西川 おそらく。

近藤 自分から、辛いとは言っていないから。

西川 おそらくですね。

近藤 おそらくです。

西川 全然知らなかった。

近藤 言っていないなら、知らなくてもしょうがないですよ。

西川 でも、態度とか。ちよつとした言葉尻とか。

近藤 優しい人ですから。

西川 おそらく。

近藤 優しいですよ。

岡さん、西川さんのことを心配してましたよ。

西川 俺を。

近藤 はい。

西川 何で。

近藤 優しいからだと思います。

西川 俺、何か出てました。

近藤 私には分かりません。

でも、岡さんには分かったんじゃないですか。

西川 あいつは、何て言っていたんですか。

近藤 多分、何か悩み事があるんじゃないかって。

多分、人に言い辛いことが、何かあって、悩んでんじゃないかって。

言えれば楽になるかもしれないのになあつて。

西川 あいつも一緒じゃないですか。
近藤 私もそう思いました。
西川 ∴
近藤 私、岡さんのことが好きなんです。
西川 ∴
近藤 それもあって、姉のことが許せないんです。
西川 ∴
近藤 岡さんは、私の気持ちは知ってますよ。
西川 ∴
近藤 離婚した後、私、岡さんに、私の気持ちを伝えました。
西川 ∴
近藤 断られました。とても丁寧に。
ますます好きになっちゃいますよね。そんな風にされたら。
西川 ∴
近藤 この前、ここに連れて来てくれた日。
初めて岡さんに誘われました。
嬉しかったです。
でも、ここに来る途中、ここにいる時間、帰り際に食べたご飯。
何となく、色々伝わりました。
何で、ここに連れてこようと思ったのか。
私に何を伝えなかったのか。
西川 何を伝えなかったんですかね。
近藤 これ以上ないくらい丁寧に、私を振ったんだと思います。
西川 ∴

近藤、扉の方へ。ガチャガチャ。

近藤 今は、諦めることを頑張ってます。
西川 ∴
娘がね。部屋から出てこないんですよ。
2年位前から。
俺がいないときに、こつそりと部屋から出て、食事だったり、トイレだったり、生活はしてるみたいですが、基本的に、部屋から出てこないんですよ。
扉がね、開かないんですよ。
ずっと、重かったんです。
もちろん、今も重いんですけど。
ふらつと散歩に出て、この扉を見つけました。
何か、どうして良いか分からなくなつて。
最初、娘に電話しようと思つて、でもできなくて、アドレス帳の、娘の下が、岡だったんです。

近藤 娘さんが部屋から出てこない原因は。
西川 わかりません。
わからないんです。
こんな風になって、いろんなことを考えました。
考えれば考えるほど、娘のことを何も知らないことだけがわかりました。
近藤 岡さんには、話したんですか。
西川 話してないです。
近藤 お互い様ですね。
西川 ∴
近藤 不思議ですよ。
西川 ∴
近藤 この扉。
西川 ∴
近藤 何か解決したわけじゃないのに、何かがある感じするじゃないですか。
西川 確かに。
近藤 まあ、私の場合は解決した感じですけどね。
西川 もつたいないな。
近藤 何かですか。
西川 元奥さんの妹だつて言つてもね。
好きだつて言つてもらえてるのに。
近藤 そういところが、娘さんに嫌われたんじゃないですか。
西川 冗談でも、そういうこと言わないで。
近藤 西川さんもですよ。
西川 すみません。
おじさんの性みたいなものだから。
近藤 気にしてるんですか、おじさん。
西川 気にしてませんよ。
近藤 私、好きですよ。
おじさん。
余裕のあるおじさん。
西川 余裕ねえ。
ないないない。ないよ。そんなもん。
近藤 そんな風に言い切れるのが良いんですよ。
西川 必死な余裕。

柔らかい間

近藤 帰りますね。
西川 わざわざありがとうね。
近藤 私もすつきりしました。

ずつと鍵屋さんだと思われてるのも、変な感じだったので。
西川 疑わなかった。
近藤 それじゃあ。

近藤、退場しようとする

西川 近藤さん。
岡に会いますよ。呼び出して。
今日来たのは、本当はそういうことですよ。

近藤 ː
久しぶりに、岡さんの、ああいう顔見ました。
一人にとって、久々の再会は、本当に偶然なんだろうけど、その偶然が大切なことであるんだと思います。

西川 そうだね。

近藤 岡さんのこと、よろしく願いますね。

西川 俺たちは、近藤さんを、少しでも助けることができたのかな。

近藤 それは、もう少ししたら、わかるんじゃないですかね。

西川 良いことだったら良いね。

近藤 そう思います。

西川 ː

近藤 ありがとございます。

西川 何が。

近藤 何か、励ましてもらって。

西川 余裕あるから。

近藤 素敵です。

西川 あ、そうだ。

近藤 ː

西川 見つけた。

行きたい場所。

近藤 そうですね。

西川さんは。

西川 俺はね、扉の前で待つことにした。

近藤 それも良いですね。

西川 近藤さんは。

近藤 ː

秘密です。

西川 参ったな。

若い子の秘密は、強力なんだよな。

近藤 それじゃ。

西川 ː

近藤 頑張つて。
西川さんも。

近藤、退場
西川、扉付近をうろろろしながら

西川 余裕。
うそつき。
きまりきつたこと。
どうもろこし。
しまりま。
まつすぐ。
偶然。
：
よし、俺も帰る。

西川、退場する
照明、暗転

7

照明、明るくなる
舞台上、岡が立っている。
西川、登場

西川 おう。
岡 おう。
西川 ：
岡 ：
西川 離婚したんだってな。
岡 娘さん、部屋から出てこないんだってな。
西川 ：
岡 ：
西川 言うか普通。
岡 普通じゃないんだよ、あの子。
良い子なんだけどな。
西川 それは分かるけど。
何か恥ずかしくない。うちら。
岡 わかる。
西川 え、どうやって切り出そうとか、色々思ってたんだぞ。

岡 俺だって、そうだよ。
西川 どんな顔して言おうとかさ。
岡 わかる。
西川 どんな流れで言おうとかさ。
岡 わかる。
西川 ええ。
岡 何か、ごめん。
西川 いや、謝らなくて良いけど。
岡 俺が、何か、ごめん。
西川 良いって、良いって。
岡 ∴
西川 ∴
岡 でも、まあ、お互い色々あるな。
西川 何もない人間も、そういないだろうけどさ。
そうだな。

岡、扉を触る

岡 どこまで聞いた。
西川 お前の方こそ、どこまで聞いた。
岡 意味ねえな。
話せば良いんだよな。
西川 そうだな。
岡 せつかくだから、話せばいいんだよな。
西川 そうだな。
岡 ∴
西川 ∴
岡 さてさて、
西川 さてさて、
岡 さてさて、
西川 さてさて、
岡 ∴
西川 ∴
岡 じゃあ、俺から。
西川 ああ。
岡 何。
西川 こういう所なのかな。
岡 何が。
西川 優しさ。
岡 何それ。

西川 近藤さんが、お前のこと、優しい人だって言ってた。
岡 そうなの。
西川 俺は納得してなかったんだけど、今ちよつと分かった。
だって、俺の頭の中、じゃんけんだったもん。
岡 別にじゃんけんしても良いよ。
西川 いや、どうぞ。
岡 ∴
西川 ∴
岡 とりあえず、1ヶ月前に離婚したんだ。
奥さんの離婚が原因で。
俺たち、子どもいないからさ、びつくりするほど速攻で。
西川 後悔は。
岡 してない。
西川 奥さんに対する気持ち、無くなってた。
岡 俺は普通にあつたけど、向こうは、無くなってたね。
西川 辛い。
岡 うーん、よくわかんない。
辛くないわけじゃないと思うんだけど
色々違うわけじゃない。
仕事から帰ってきた時。
休みの日。
やることから、風景から。
一緒なのは、職場だけ。
戸惑ってるつてのが、一番正しい言い方かも。
西川 ∴そつか。
岡 知つてんのかと思つた。
西川 何で。
岡 タイミング良かったから。
しかも、来たら、このドアがあつてさ。
西川 扉な。
岡 扉な。
お前なりの励ましなのかと思つたよ。
西川 残念。
岡 でも、ちよつと、気持ちがさ、軽くなつたよ。
西川 ∴
岡 何たる。たまに思つちやつたりするんだよ。
この世に俺一人だけしかいないんじゃないか的なこと。
西川 ∴
岡 何でアメリカなの。
岡 え。

西川 何か、それなりに意味があるんだろ。
岡 アメリカの西海岸をさ、歩こうかなって。
西川 何それ。
岡 あるんだよ。そういうコースが。
1600キロ位。
荷物背負って、キャンプして、歩こうかなって。
西川 歩いてどうするんだよ。
岡 わかんない。
それも良いかなって。
西川 仕事は。
岡 やめようかなって。
ちやうど、嫌になつてたところもあるし。
家買おうと思つて、金も貯めてたし。
向こうが原因だから、慰謝料とかもないしぞ。
1年位なら、何とかなるかなって。
西川 その発想、ちよつと自暴自棄じゃなない。
岡 だからビビつてるよ。
実際会社辞めるのもビビつてるし。
空港言つた時点で、ビビると思うし。
色々な時点で、ビビると思うんだよ。
だから、開けたらアメリカ。
問答無用でアメリカ。
西川 ああ、なるほど。
岡 そうなつたら、やるしかないかなと。
西川 確かにな。
岡 自暴自棄なのかな。
西川 それでも良いと思うよ。
そんな時期でしょ。
岡 ∴
ありがとら。
西川 ∴
岡 で、お前は。
西川 俺。
岡 娘さん。
西川 うん。
2年位前かな。
部屋から出てこなくなった。
俗に言う、引きこもり。
岡 そうなんだ。
西川 言い方は悪いけど、もう慣れたもんでぞ。

でも、重いんだよ。
家の中が。
岡 何で。
西川 分からない。
：
分からない。
岡 そっか。
西川 でもさ、二、三回か、お前と近藤さんと、俺のことをおじさん呼ばわりしたおじさんと話してさ、ちょっと軽くなった。
岡 誰だよその、とにかくおじさん。
西川 お前のこともおじさん呼ばわりしてたよ。
岡 俺は別におじさんだから良いけど。
西川 そうなの。
岡 誰だよそれ。
西川 それはまた今度。
話に大した影響ないから。
岡 ：
西川 部屋から出てこないってことはさ、当然、学校にも行かなくなるわけだろ。
岡 そうだな。
西川 何度が学校に呼ばれて、行ったりしたんだけどさ、偶然たとは思っただけど、グラウンドから見える、校舎に付いてる時計あるじゃない。
その時計がさ、止まってたんだよ。
何か、すげえ悲しくなってきた。
単に時計が電池切れて、止まってるだけなのに、娘の時間が止まってるように見えてさ。
悲しいし、娘が不憫だし、分からないし、許せなくて。
家帰ってから、ドア越しに、結構きつく言っちゃったんだよ。
それつきり、娘は、俺を避けてるような感じがして。
もちろん、その後、そのことは謝っただけど。
なんだろう、今度はさ、俺が避けちやつてるような感じなんだよな。
時計が止まっただけなのにな。
岡 ：
西川 娘の時間はさ、止まってなんかいいよな。
岡 そうだな。
西川 それ気付くまで、俺、大分かったよ。
多分、娘にとって、今の時間も、大切な時間なんだよ。
そのことを、俺たちだけでも、知っておかないといけないんだよ。
岡 ：
西川 そんな感じ。

岡 　　：
西川 　みんな、色々あるよな。
岡 　　そうだな。
西川 　便利じゃないよな。
岡 　　そうだな。
西川 　　：
岡 　　　：
　　　　：
　　　　：
　　　　：
西川 　　：
　　　　：
　　　　：
岡 　　何だそれ。
西川 　　それも選振肢の一つでしょ。
岡 　　　そうかもしれないけど。
西川 　　扉が開いて、出てきたとしても、次の扉がまたあるわけじゃない。その次も、その次も。
　　　　俺はさ、その度に、待っていたい。
　　　　開くのを。
　　　　少し先にいてさ。
岡 　　　：
西川 　　　：
岡 　　　それも良いかもな。

音楽ら

西川 　　帰るか。
岡 　　　そうだな。

西川、岡、退場

西川 　　で、近藤さんとはどうなんだよ。
岡 　　　今聞く。
西川 　　実は、気になってたりしてる。
岡 　　　下乗だな。
西川 　　おじさんだから。
岡 　　　おじさんイコール下乗ではないからな。

等々話しながら退場 照明、暗転

照明、明るくなる

矢野、登場

扉の周りでうろたえる。一通り遊んで、退場

喜楽6

照明、ゆっくりと暗転

了